

IPMUが東大の一員になりました!

IPMU 機構長

村山 斉 むらやま・ひとし

3月11日、日本で記録されたことのないマグニチュード9.0の東北関東大地震と、その後の津波、福島第一原子力発電所の危機は大変なショックでした。命を落とされた方々、その家族の皆様にご心よりお悔やみ申し上げます。そして避難所や大きな損害を受けた地域で厳しい暮らしを強いられている方々に心からの励ましの言葉をお送りしたいと存じます。

IPMUでも激しい揺れを経験しました。固定されていない物が床に落ち、電車が完全に止まったため、メンバーの多くが帰宅難民となりました。スタッフは献身的にIPMU研究棟に泊まった人に食べ物を用意したり、海外の家族とコンタクトをとれるように手配しました。幸いなことにIPMUのメンバーは全員無事でした。

一方、明るいニュースがあります。2011年1月1日、東京大学に国際高等研究所（TODIAS）が新たに全学組織として設置され、1月11日、数物連携宇宙研究機構（IPMU）が国際高等研究所の最初の機構として認定されました。これで数物連携宇宙研究機構は東京大学の中に「市民権」を得て、総長の「東大を世界を担う知の拠点へ」のビジョンを実現する一翼を担うよう、宇宙の根源的な謎の研究に一層励む機会を与えられました。そしてIPMUが東京大学の恒久的な研究機構を目指すための大きな一歩を踏み出しました。

数物連携宇宙研究機構は文部科学省の「世界トップレベル研究拠点形成プログラム」（WPI）に採択され、2007年10月1日に発足しました。国から10年間サポートを受け、(1) 世界最高水準の研究水準、(2) 英語を公用語とし、外国人専任研究者を多く採用することによる国際化、(3) 分野融合研究によるブレークスルー、(4) 日本

の大学にいままでなかったような組織を作ることによる研究システム改革を実現して「世界の目に見える研究拠点」を作ること、を要求されています。

発足後は全くのゼロからのスタートで、目が回る勢いで研究者の国際公募・採用、研究計画の設定、研究環境の整備を進めてきました。3年後の今は専任研究者約65名、学生・スタッフを含め総勢約120名の研究機構に成長、専任研究者の外国人比率は約6割です。

しかし、IPMUが長期的に継続していくために必要なリソースを確保するためには、まだまだ努力が必要です。また、文科省、東大、そして皆さん一人一人からいただく積極的なご支援がとても大事です。IPMUを科学者のコミュニティでも一般の人の目で見ても十分に評価される場所まで持っていき、IPMUをなくすことが到底考えられない様な状況にまで持っていく必要があるのです。

遠大なビジョンを持つ濱田総長、機構の設立に深く関わられた岡村所長、そして国際高等研究所の設立を推進された東京大学の全ての皆様にご深く感謝します。そして「世界を担う知の拠点」の一翼となるよう努めて参ります。一層のご支援、ご協力、よろしく願いいたします。

